Q：潰瘍性大腸炎とはどのような病気ですか？

A：潰瘍性大腸炎とは、大腸に広範な慢性の炎症がおこる、原因不明の炎症性腸疾患です。直腸から上流側に連続性にびらん（ただれ）や、潰瘍などの炎症所見がみられるのが特徴です。病変が直腸だけにみられる直腸炎型、直腸から大腸の左半分まで広がっている左側大腸炎型、大腸全体におよぶ全大腸炎型に分類されます。

症状としては腹痛、下痢、血便で、特に粘血便（粘液と血液の混じった便）が特徴的です。ひどくなると、1日に10回以上も粘血便や血便がみられます。緩解（良くなること）、再燃を繰り返して、慢性に経過する症例が多く、10年以上の長期経過例では、大腸がんの発生率が高くなるといわれています。薬物療法としては、5・アミノサリチル酸製剤、副腎皮質ステロイド剤などの薬剤を用いて炎症を抑えます。ステロイド剤は効果の高い薬ですが、長期使用で重篤な副作用をきたすことがあり、注意が必要です。内科的治療で効果がない場合や、大腸がん合併例などでは、外科的に全大腸切除が行われます。

（岡田俊一・おかだ内科クリニック院長、甲府市北口2―9―12、ニシコー北口駅前ビル2F）
☎055・288・1801